

登場人物 女6名 男2名

園田 正 (四一)
結城 未央(一六)
佐藤 裕子(三六)
名波 由美(二六)
三池 雅美(五二)
結城 美智(二〇)
久保 仁 (二九)
前里 陽子(三八)

渋谷から少し離れた井の頭線の駅。そこから少し歩くと取り壊しの決まった築年数の古い小さなビルがある。そのビルには屋上があり、腰の高さほどの錆びた柵に囲まれている。

だがそこはなにもない屋上ではない。古い柵に囲まれたこの場所は不思議と生活の匂いがある。テーブル、椅子、筆筒、ソファ、等身大の鏡等が、ある部屋の一室のように置いてあるのだ。が、それらの家財道具は決して新しいというものではない。このビルに相応しているかのように古いのである。きつと誰かが捨てていったものをこの場所で再利用しているのだろうし、屋外ということもあってその傷み方も早いのもかもしれない。

そしてそれら家財道具はここにいる住民によってうまく利用されているらしく、使えるテーブルや椅子などはきちつと配置されている。ここに居る者が一時の休息を楽しみ、天気の良い日などは屋上にある物干し竿を使って、洗濯物を干しているようだ。

さらに完全にゴミとして扱われているもの、たとえば廃材や使えなくなった椅子等があるが、それもきちつと整理されて隅に置かれているのである。

さらにこの屋上の錆びた柵の向こう側は(舞台正面奥)渋谷円山町のホテル街見える。夜になると淫靡なネオンの残光がこの建物を照らしている。

春の夕暮れ。

近隣のラブホテルのネオンが輝いている。

薄暗い中、誰かがテーブルの前に座っている。

女だ。女はそこでハンカチを使って何かを磨いている。

女の名は前里陽子。

そして陽子の座るテーブルの上には小さなビニール袋が置かれていて、その磨いたものを大事そうに入れていく。

陽子はそれが終わると、ふいに等身大の鏡の前に立つ。長い髪を整え、艶やかな口紅を塗る。

ややあつて、男が入ってくる。男は陽子の鏡のなかに入るようにその姿を映す。

陽子はその男を鏡越しに見つめる。

男の姿は若くはない。が、まだまだ活力が残っているらしく、他人を威圧する鋭利さのようなものも持っている。

男は園田正。

しばし鏡越しに陽子と正は見つめあつ。

やがて陽子は、ビニール袋をテーブルに置いたままであることに気が付き取りに行く。

が、それより先に正が掴む。

陽子 ……返してくれます？

陽子、正に近づく。が、正はふざけたように、その握っているものを持って陽子から離れる。

陽子 返してよ！

陽子、正の握っていたビニールを強引に取り返す。

と、その勢いでビニールの中身が零れ落ちる。

それは綺麗に磨かれた一円玉…。

正 !

正、手に取るうとする。

陽子 触らないで！

正 一円玉…

陽子、転がり落ちた一円玉を拾い集めていく。

正 ずいぶん光ってるな…

正、陽子が一円玉を拾い集めている姿を見る。

陽子 (正の足もとから顔を見て)……

正 ん…?

陽子 (と、なにか言おうとするが)……
正 ……

陽子、拾い始める。

と、正、再び落ちてしている一円玉を拾おうとするが、陽子に睨まれる。

正 (手をとめ)……

陽子 ちよっとどいて…(と、一円玉を拾う)

陽子、一円玉を拾い終わると大事そうにビニール袋に入れる。

正 出してくれるな

陽子 は？ なんで出なきゃならないのよ

陽子、鏡に向かい化粧道具をあける。

正 駅のトイレでやってくれ

陽子 鏡が汚くつていやなのよ

陽子、鏡に向かう。

正、陽子を執拗に見つめる。

陽子 もう、集中できないな…。なんなの？

陽子にゆっくり近づいていく正。

陽子 (鏡越しに)…なに？

正 (止まり) 会わなかったか…

驚き振り返る陽子。

正 地蔵さんだ…。その料亭のまえにある地蔵だよ…。『遊びませんか』ってふいに暗がりから出てきて…

陽子、鏡から離れる。

陽子 ……

正 あんただよな

間。

陽子 ああ…あの地蔵にお参りしていただきでしょ。後ろから声かけたら驚いて…

正 はあ？ お参りなんかするか。通り過ぎようとしたときに、声かけてきたんだ

陽子 しっかりと地蔵に手を合わせていたわ。だから驚いて持っていたカン…お酒よ、酎ハイかなにか落としたんじゃない

正 ……

陽子 それで『飲むかって』言って、落としたカンを差し出したのよ…。そのあとフラフラどっか行ったわね。寂しそうにね…

正 ……

陽子 (軽く笑い) そんな表情をしてたわ…。普通の勤め人じゃないよね、遊びにきたの？

正 あんたホテルの女か

陽子 だったらなんなの？

正 最近のホテルってのは立ちんぼもやるのか

と、いきなり陽子が使っていた鏡を隅に移動させる正。

陽子、鏡を掴む。

陽子 なにするの！

正 立ち退きだ

陽子 ……

正 知らないはずはないだろう

陽子 そんなに急ぐことかな？ もっと先の話だって聞いたわね…

正 二週間もすりゃここはガレキだろ。ボヤボヤしているとパワーショベルのしたじきになるぞ

陽子 鏡戻してくれる？

正、陽子の腕を掴んで、鏡の位置から離そうとする。

陽子 放して！

正、陽子の腕を放す。

と、陽子、笑い出す。

正 おい…お姉さん、こわれたのかい…？

陽子 この鏡、あたりまえのようにずっと使っていたのに…

と、また笑う陽子

正 じゃあ家に持って帰ってくれ。鏡だけじゃない、ここにあるもの全部だ

と、勢いよくテーブルを隅のほうへ移動させる正。

正 なんなら住所教えるよ。送りつけてやるから…。着払いでな

未央が入ってくる。

未央 何してんの！

正 おいつ勝手に入ってくるな

未央 やめてよ…

未央、テーブルを押さえる。

正 お前のか？

未央 使っただから…

未央、テーブルを元に戻そうとする。

正 (テーブルを押えて)…他所で使えよ

未央 どこに持ってけばいいのよ…

正 夢の島はどうだ？

未央 ここがそうよ！

正 違うね、更地にするんだ。手を放せ！

未央、手を放さない。

鏡を元の位置に戻している陽子。

未央はテーブルの前にある椅子に占拠するように座ってしまっ。

陽子は鏡を元の位置に戻すと、化粧の続きをはじめ。

正 (怒り心頭に) 仕事したけりや他にいくところあるだろ！ 渋谷にホテル事務所、いくつあると思ってるんだ

正、強引にテーブルを動かそうとする。

未央が踏ん張るようにテーブルを抑える。

未央 屋上のものを処分するのは自分の仕事じゃないって、言ってたよね…

正 このオーナーがケチだってことだろ…。業者に頼んだら、さらに金がかかるからな…

未央 ここがいいの。他にこんな場所ある？

未央、じつと座ったまま動かない。

由美が手にビニール袋を下げて入ってくる。

ビニールの中からジュース、お菓子等々の食料をテーブルの上に広げる由美。

正 おい…

由美 じゃまよ…

正 は？(呆れて)…お前も事務所出ていく約束じゃないか

由美 店長、まだ出て行く気はないわよ。ねえ未央

未央 うん、言ってた。…あ…この駄菓子好きよ

由美 やっぱりね

未央 (菓子袋を握って)…こんなのどこで買ったの？ もうないよ

由美 あるんだなー渋谷に。昔ながらの駄菓子がブームになってるみたいでさ、店に置き始めたのよ

未央 ええっ、どこどこっ

由美 渋谷駅に向かって道玄坂をおりていくでしょ。途中、世界堂のビルがあるじゃない…。そこを右に入っていくと、

正 おい…

由美 ……食べたいの？

正 ああ食べたいね、…お前らは向こうで食べてくれ、渋谷から離れたずっと向こうだ

由美 あんたが向こうで食べて頂戴。ほら(菓子袋を差し出し)、一個百円ね

正 ……

由美 食べないの？

未央 おいしいよ

三池雅美がケーキの入った箱を持って入ってくる。

雅美 ごめんね、遅れて…(正を見て)あら、…なんなの？

雅美、ケーキの箱をテーブルに置く。

雅美 テーブルずれてるじゃない。使にくいわよ…

雅美、テーブルを掴む

正もテーブルを掴んだままている。

雅美、テーブルを元の位置に戻そうとする。

が、テーブルは動かない。

雅美 (正に)…あんたも手伝いなさいよ

正 できないね

雅美 あら、どうして…？

正 三池さんね、この間もお話したでしょう…何やるか知らないけど、ここだって奇麗

さっぱり処分しなきゃならないんだ

雅美 すぐだなんて聞いてないわね…。とりあえずテーブルは戻しなさい。話はこれが終

わってからでいいでしょ

由美 はやく手をどかしなさいよ

正 時間がない

由美 ここでケーキ食べる時間もないの？ もういいわ。おばさん、このままでもやまじつよ

由美、テーブルの上に皿を並べ始める。

雅美、ケーキの箱を開ける。

雅美 未央の誕生日会よ、今から

正 他でできるだろ

雅美 やらせてくれないなら、立ち退きなんか無理ね。応じられない

正 おいおい冗談じゃないぞ。そんなんを話を振り出しに戻そうってのか！

蝋燭を一本手に取り、正を見つめる雅美。

雅美 どうすんの？ 本気よ

正、ややテーブルから離れる。

由美が次々と菓子を広げ、ジュースなどを紙コップに入れたりしている。

陽子、化粧が終わると出て行こうとする。

由美 どこいくの？

陽子 仕事…

雅美 ケーキぐらい食べていきなよ

陽子 行かないと

由美 この時間じゃまだ客なんかつかまらないわよ

未央 陽子さん甘いもの嫌いな？

陽子 終わってから頂くね…

陽子、出て行く。

由美 探したっていないのに…

雅美がケーキに蝋燭を立て始める。

未央 おばさん、おいしそうだね

雅美 ちょっと甘すぎたかなあ

由美 甘すぎるぐらいがいいのよ。ね、未央好きでしょ

未央 もう…たまらない！（と、笑つ）

雅美 よかった。（正に）あなたも味見する？

正 ……

雅美 あんたの年なら…そうねえ…このぐらいの子供がいてもおかしくないわよね

と、一六本の蝋燭に火をつける雅美。

正 （蝋燭を見て）子どもって…未成年か！

未央 もう一六よ…なによ大げさに騒いじやって

由美 あ、その顔はいるわね、子供

正 ……

由美 （雅美に）そうみたい

正 おれに子供がいちやまずいのか
雅美 ……もしかして、娘？

正 ……

由美 娘みたいね

正 やれよ早く！

雅美 それじゃあ許してあげないかね。…さあ始めるか（椅子に座る）

未央が感慨深げに蠟燭を見つめる。

雅美、由美、未央がケーキを囲むように椅子に座っている。

正、やや離れたところからその光景を見つめる。

由美 （雅美に目で合図して）せーの！

由美と雅美がハッピーバースディを唄いはじめる。

と、仁が入ってくる。

テーブルに近づくと、

由美と雅美が気が付き、歌を止めてしまう。

仁 （未央と由美に）…あれ、おまえら事務所にいた女だよな…どっいつのこと？ コレ

由美 邪魔しないでよ

仁 （近づくと）へえ…うまそうだね…

雅美 （制する）なんだよ、あんた

仁 ……

雅美 未央、蠟燭消して

未央 （仁が気になる）…

仁 いいんですか？ こんなことやらせて

正 待ってやるう、どうせすぐ片付く

仁 そりゃマズイですよ。オーナーが急かしてましたよ…

仁、屋上の周りを見渡すと、おもむろに物干し竿を握る。

と、いきなり物干し竿を折る。

雅美 ちよつと！

正 事務所の方、話をついたのか？

仁 つきましたよ…

由美 あれ話し合いついていつの？

仁 だれが見てもそうだろう！

由美 …いきなり事務所来て、『ハンコ押せよ』だけしか言わなかったじゃん。…あれじゃあ店長だつて聞く耳もたないわ

仁 (折れた物干し竿を眺めて) どうするよ、これ…

雅美 あんたねえ、まだ使ってるのよ！

仁 なんだ…おばさん、さつきから…

雅美 そりゃこつちが聞きたいよ！

正 今日から手伝うことになった、仁だ

と、折れた物干し竿を雅美の方へ投げる仁。

雅美 あたしは嫌だね、こんなのと関わるなんて

正 話し合いに乗ってくれよ

雅美 あんたとならね…

仁 へっ、今更まわりくどいことやめましようや。俺達のやり方じゃないですよ

雅美 出てって頂戴！

仁 出る？ 誰が？ 居座ってる住民でしょ。話が逆だよねえ、おかしなひとだね

由美 さきに乾杯しようか

雅美 そうそう、未央、コップもって…

雅美、未央、由美がジュースで乾杯をする。

が、すぐに、テーブルに近づくん。

未央が強張った顔でケーキをかばう。

仁 ネエちゃん…一緒にケーキ食べてあげるよ。年いくつになったんだ？ (ケーキを

みて)…アレ…さつき事務所で見たととき若いなと思っただけど…なんだ、まだガキじゃねえか…ホテル嬢も低年齢化かい

と、笑う仁、未央の肩を掴む。

由美 何すんの！

未央 (手を払い) 痛いよ…

正 少し待ってやるか…。なんならいつぶくしてこい

仁 いやいや一緒に食べてあげましようよ、そのほうが早い。…もう日が暮れるしさ

雅美 馬鹿ね…あんたの分なんかないよ

仁 あれ、こんな菓子もあるの…。懐かしいなあ、遠慮なく頂くか…。ねえ正さん…

正 タバコないのか？

仁 　　いつぶくする前にやりましょ
正 　　いいから、ほれ…（と、タバコを差し出す）

仁、受け取らずに未央の方へ。

仁 　　（未央に）どうした？　ふるえてるの？

由美 　　近づくなよ…

仁 　　アレ…嫌われたの？　おれ（と、未央の肩を掴む）

未央 　　やめて！

正 　　仁！

正、仁の腕を掴み、テーブルから引き離す。

正 　　終わってからでいいと言ってんだ

仁 　　ああ？　どういうマネですか、放してくださいよ…

由美 　　（正に）連れて帰ってよ

仁 　　グズグズしてつと片付けられなくなるでしょ

と、正の掴んでいた腕を振り払う仁。

店長の佐藤裕子が入ってくる。

ツカツカと正の方へ向かい、退出同意書を出す。

佐藤 　『無条件で退出する』ってどういうこと？　はじめに持ってきた同意書と違うわよね

正 　　ん…？　お前がつくつたのか？

仁 　　勝手にホテトル事務所を開いたんだからさ、出るのに条件なんかつけられないですよ。これでハンコつかせりゃ仕事がやりやすくなるんでね…

佐藤 　こんな同意書に押せる？　だいたいオーナーの都合で退去しなきゃならないんだし、引越し料くらい出すのがスジってもんよ

正 　　（同意書）見せてくれ。中身によってはかえってゴダゴタするからな

が、いきなり同意書を佐藤から奪う仁。

仁 　　（正に）…朱肉ありますか？　このさい、拇印でいきましょ

佐藤 　　返しなさい！

陽子がゆっくり入りってくる。

佐藤が、仁から同意書を取り返そうと掴みかかる。
仁が佐藤の腕を強引にねじ伏せる。

正 仁！

由美 放しなさいよ！

仁 朱肉ですよ、正さん…ほら、押しちゃいましょ！（佐藤の腕を掴み、正に差し出す）

由美 もう、許さない！（と、折れた竿を拾う）

と、いきなり仁の頬を叩く佐藤。

啞然とする仁。

叩いた拍子に落ちた同意書を拾う佐藤。

我に返り佐藤に掴みかかる仁。

陽子が掴みかかる仁を止めようとして、腕を抑える。

が、すぐに突き飛ばされてしまう陽子。

その瞬間、正が仁の体をおさえつける。

仁 （わけがわからなく）ああああっ！

正、仁を放す。

仁 …ああ？ これ…どういふことかな…その、なんだ…よこせ！（佐藤の手に渡った

同意書）

佐藤 出直してきなよ…こんな紙くずなんかで動かないからね

雅美 由美、それ返して。あたしのなんだから…

正 いや、ちよっとこっちにかしてくれ

正、由美から竿を取り、握りしめる。

仁 （正の握る竿を見つめ）……

正 今日は帰れ、ひとりでやる

気が付けば、正は女達の側において仁を見ている。

突然、大笑いする仁。

仁 （止まり）…そうですか…ひとりで行いますか…（掴まれた肩に触れ）痛えなあ…でもほんとに帰っていいんですか？

正 明日は遅くてもいい…

間。

仁 …まあ氣イつけてくださいよ…

仁、ゆっくり出て行く。

正が雅美に折れた物干し竿を渡す。

雅美 どうするのよこれ…

雅美が大事そうに屋上の隅に置く。

未央がケーキを前にして俯いている。

正 (未央に気が付き) さ、始めるか！

佐藤 なにあんたが音頭とってるの

正 こついうのはな、トップから入るといいんだよ！ ハッピーバースデー！（派手に拍手をする）

佐藤 空回りしてるよ…（と、軽く笑う）

由美、佐藤、雅美が席に座る。

雅美 (陽子に) あんたもこつちに来なさい

が、陽子は近づかない。むしろ何やらソワソワと探している。

由美 蝋燭消して、溶けちゃう！

未央が一息に蝋燭を消す。

拍手。

雅美がケーキを切り始める。

陽子は屋上の隅の方でソファの下を覗き込んだりしている。

正、陽子の姿を見つめている。

雅美が切ったケーキを皿にのせて皆にふるまっている。

雅美 (正、陽子にも) 食べなさい、あんた達も

雅美、皿に乗ったケーキを差し出す。
正が受け取る。

正 (ケーキを差し出し) 見てみるよ。うまそうだよ…

陽子 (受け取らない) ないのよ。一枚たらないの…

雅美 なに探してるの？

陽子 一円玉…

雅美 後でいいじゃない…

由美 おばさん…いいわよ、いつものことなんだから

陽子 いつもって、どういうこと？

由美 だって…事務所で無くしたときも大騒ぎしてた

陽子 誰だって、大事なものが無くなればそつするでしょ

由美 あなたの都合ちよつとちがうじゃない。だれも取らないわよ…だから変に疑われる
と不愉快なの

未央 (陽子に) 後であたしも探すよ。ねえ、クリームが沢山のっついて甘そうだよ…

正、陽子にケーキを差し出す。

陽子 ……

正 仲間のお祝いだよ…食べるよ

陽子、受け取らずに正から離れる。

まだ一円玉が気になる陽子。

正、屋上のフェンスの方に行く。

佐藤が手にしていたプレゼントを出す。

佐藤 (プレゼントを差し出し) これ、気に入るかな…おめでとつ

未央 ええっ… (受け取り)

佐藤 ちよつとふんぱつしたわよ…。開けてみて

未央 …包装紙の香り…好きなんだ… (と、包みを抱きしめる)

未央、プレゼントの包みをゆっくり開ける。

箱の中からスニーカーが出てくる。

佐藤 事務所にきた時から靴がボロボロだったでしょ。ずっと気になってたのよ
未央 ありがとう！

未央がさつそくスニーカーを履いてみる。

佐藤 どう？ サイズ、合う？

未央 うん。もったいなくて歩きたくないよ！

佐藤 なに言ってるの…（と、笑い）おもいつきり跳ねてみなよ

未央が椅子から立ち上がり一歩踏み出す。
嬉しそうに歩きまわる未央。

正 いいところあるな、佐藤さんも

佐藤 あら…どういう意味？

正 ……あんただって大変なのに、娘みたいにしてるじゃないか

未央 がんばって仕事します！

佐藤 だめよ…もう無理しないで頂戴

未央 大丈夫ですよ…指名が入ったら走っていけるし（と、笑う）

佐藤 冗談言わないで

正 あんたが客取らしていたんだろ

未央 わたしから頼んだの

佐藤 もうやめた方がいいわね…

未央 ……

佐藤 ここがなくなるって聞いてから、お金のことはわかりでさ…この子達には悪いと思
っているのよ…。いやな客相手でもこっちは選ぶ余裕もないから…

正 電話で判断できるのか？

佐藤 声でわかるの。そいつの性癖とかね…

由美 普通のセックスができないのよ…。この間の客なんて、あたしがシャワーから出
きたら犬の首輪をはめて待ってるの。（苦笑する）『お前見たいな犬を飼った覚えはな
い』って怒鳴ったら大喜びしてたわよ…。まったく、女王様やらされるなんて…。う
ちはSM倶楽部じゃないんだからさ…。どうしてそんな客ばかり付くのかしら、あた
し…

佐藤 増えたのよ、勘違いした客が…。とくにお堅い仕事してる人がそうなるの…。医者
とかお役人とかさ…。偉くなると、ひとに命令されることが懐かしくなるらしいよ

由美 そうそう、その首輪の客も大学の先生だって…（と、笑う）

雅美 ……むかしは花街だったのよ、円山町って…。芸者衆相手にそれなりの客が集まって
いたのに…。気がよくて、遊びを心得たひとがさ…

佐藤 もうまともな客のほ数が少ないわよ

雅美 高嶺の花だったな、この町のおんなは。上客が育てて花になったんだけどさ…。今
じゃ雑草にもなれないわね…

佐藤 それにしても、なんとかならないの？ お金…。ああもう嫌だな…。お金って響き！
景気わるいののに、あんたが来てよけい嫌な響きになったね…。引越したも出ないなん
てどっかしてるよ…

正 今は金を出し渋るのがあたり前になってる。柱にちよっとキズ付けただけで、全部
交換しろって脅されたやつもいるくらいだ

佐藤 はじめからそういう仕事にすればよかったかな。立ち退き屋か…。いいよそれ（苦笑
する）

正 あんたのほづが向いてそうだな

佐藤 そう言われるとなんだか腹が立つわね

陽子、いつかフェンスの付近でぼんやり佇んでいる。

未央、陽子に近づく。

未央 ケーキ食べなよ

陽子 かわいいわね、その靴

未央 でしょ。陽子さんの誕生日はいつなの？

陽子（曖昧に笑い）さあ…いつだったけ…

未央 みんなでやろうよ誕生日会

問。

ややして佐藤がふいに立ち上がり。

佐藤 そろそろ…

雅美 なに、もう行くの？

佐藤 電話がくるはずなのよ…。由美、あんたの客だからね

由美 あたしですか？

佐藤 今日、何日だかわかる？ いつもの司令官よ

正 なんだい、司令官って…

佐藤 自衛隊員

由美 いやだな…また上官ゴツゴツやらなきやならないのー

佐藤 我慢してよ。かなり払ってくれる客なんだから。それに、しなくていいんだし…

由美 してますよ！ 早いで…

陽子 じゃあ、わたしが…

佐藤 …痩せてるひと苦手なのよ…。まわしてあげたいんだけど…。未央、悪いわね…

未央 （うなずく）

佐藤、出て行く。

由美（立ち上がり）すっかりあいつのこと忘れてたよ…。あの司令官なんて呼べって言うたっけな。カートだけ、カートだけ…

由美、渋々出て行く。

未央、佇んだまま。

テーブルには由美と佐藤が食べ残したケーキがある。

雅美（ケーキを見て）せっかくねえ…もったいない

未央、椅子に座り、食べ残したケーキをみる。

未央、ぽつりと一口食べる。

未央の姿を見つめる正。

正、未央と目が合う。

未央 食べる？

正 甘いものは止められててな。医者から

未央（不満げな顔）……

正、テーブルのうえに残ったケーキをつまみかぶりつく。

嬉しそうにする未央。

未央 おじさん、ここ座りなよ

正 うまい！ こりゃ…

雅美 鼻！ 鼻！ クリームついてる（と、嬉しそう）

正、屋上の隅に放置してある方の椅子に座る。が、腰をおろした瞬間、足が一本

折れていたらしく、倒れる。

未央が噴出すように笑う。

正（立ち上がり）…なんだ？

未央 だからここに座ればって言ったのに…

と、また笑う未央。

正、椅子の調子を見る。

未央 ねえ、陽子さんの無くしたものを探そうよ

陽子 そうね…

未央 どうしたの？

陽子 …もしかしたら無いかもしれない…

未央 ここに落としたんでしょ？

陽子 ……

未央 他にどっか思いあたるの？

陽子 それがわからないのよ…困ったな…

正 あの一円、なにを使って光らしてるんだ？

陽子 ただ磨いてるだけよ…

正 磨いてる…。(やや驚く)一円を磨いてどうすんの。売れば倍の値段にでもなるのか？

陽子 磨いて、磨いて…大事にためておくの…ただそれだけ…

陽子、立ち去ろうとする…。

続く